

Shinichi Takeda

Sur “*transracinement*” “トランスラシンヌモン” についてのノート



My house (Nara) to FALL (tokyo) 23 Nov 2014

タイトルの『^{トランスラシンヌモン}transracinement』は「^{トランス}trans」と「^{ラシンヌモン}racinement」を組み合わせでつくった造語です。「trans」は“～を横切って、～を越えて” という意味の接頭語で、transport（運ぶ）などに見られるように“ある場所からある場所”の「～」の部分の意味があり、移動、移行など、動的なイメージがあります。一方「racinement」は、“根づく、根を生やすこと”とあるように大地と関係し、不動、定住、確固たるものなど、静的なイメージを喚起させます。しかし、この二つの語は相反するものではなく、数時間から数日あるいは数万年といった時間のスケールに差があるものなので、厳密に言えばどちらも動的だと言えるかもしれません。早いか、遅いか、ミクロかマクロかの視点の違いです。

さて、この作品は一枚の挿絵から始まりました。19世紀にフランスで刊行された世界を旅した紀行文をまとめたもの¹で、江戸についての記述の中にそれはありました。あるサムライが銀梅花の植木を両手に抱えて立っているものです。僕は人が段ボールを持ったり、荷物を背負ったり、運ぶ姿に惹かれます。それも大荷物であればあるほど魅了されます。それは人体を延長したある種の美なのかも知れませんが、人体としての限界をある程度公平に示しているからかも知れません。ヒトは荷物を持ち運ぶ事によってヒトになった。人類学者の川田順造さんは『<運ぶヒト>の人類学』（2014）の中で「運ぶ」という能力がヒトをヒトたらしめているのではないかと、ホモ・ファベル（作るヒト）やホモ・ルーデンス（遊ぶヒト）と並び、ホモ・ポルタンス（*Homo Portans*・運ぶヒト）というキー概念を提示しました。運ぶことがヒトの起源に関わってくるということです。四つん這いの動物が両手にモノを持っている姿を創造してみてください。可笑しい状態になると思います。モノを持ちながら四つん這いになることはできません。両手で何かを持つということは、「立つ」ということです。

1. Le comte Ludovic de Beauvoir, 『VOYAGE AUTOUR DU MONDE』(plon, 1878)

モノを持ち運び続けた（その必要があった）ことで、ヒトは足のみで移動するになり、手が自由になりました。その手で道具を発明し、荷物を背負い運ぶようになりました。背負うことは重いモノでも長時間、また長距離運ぶことのできる技法です。頭に壺や、たらいを乗せ運ぶ方法もあります。安定性が良いので水を運ぶことに適しています。日本では海岸部に多かったそうです。肩にかけ運ぶ方法もあります。二人で人を運ぶカゴなどもあります。では、最後にもう一度最初に戻って、手はどうでしょう。慎重に運べるかもしれませんが、重いものはそう長くは持てません。重さが体の中心より前にくるので負担が大きいのです。そのため、“手が塞がる”という言葉があるように、手の自由が奪われると他のことができなくなり、立ち尽くす瞬間があります。その瞬間、ヒトは物体に近づくような気がします。もし僕の作品が人体（姿）の物体化であるなら（未だによく分かりませんが）、ここにヒントが隠されているかもしれません。また両手に荷物を持つことは、右の版画のようにその場に留まることでもあります。休憩のひとつ、あるいは茫然と立ち尽くす瞬間。そのような動きの一瞬に作品が成立する時間があるのではないかと考えています。



銀梅花の植木を持つ太政官の通訳

植木鉢は植物のポータブル化であり、コンクリートやアスファルト

で覆われた土の上でも生きていくことができます。大地に根をはる大木から言わせれば、土の上を漂い、付着し、留まるだけの足の生えた幽霊のようなものかもしれませんが、人の手を借りて移動することができます。そして、自分では一生見ることができない景色を見ることができます。ある侍の腕の高さの風景もを。

シモーヌ・ヴェイユに『根をもつこと』(l' enracinement) という著作があります。人がそれぞれの土地に根をおろしていれば、他の根を取ることはないとその本には書いてあります。そしてヴェイユのつくった反対の意味の「根こぎ」(déracinement) という言葉もあります。トランスラシンヌモンは根を持ちながらにして移動することです。それは意思に関わる問題でもあります。しかし、根底を覆すようですが今作品自体に根はありません。根となる部分は FALL の開店当初から置いてあるオブジェをお借りしています。このオブジェを重力によって根とは反対の方向に立たせること。生け花のように枯れることはありませんが、一定の期間だけしか存在しません。その一時にしか成立しない作品です。というより、その一瞬に成立するものが僕にとっての作品なのかもしれません。

最後に運ぶことについて。なぜ自ら作品を運ぶのでしょうか？ジグムント・バウマンは現代をリキッド・モダニティという言葉²で表しています。液状化した近代ということです。不安定な時代とも言えます。液体の特性は形態を連続的に変化させ、同じ形に固定されないことです。またつねに形態変化の準備ができている状態とも言えます。ここでは時間が重要な要素です。展示されている作品はその期間だけ存在するものですが、見えないだけでその前もその後も存在するものです。プロセスがあり、結果があるのではなく、その時間の全て、作品が続いているということです。そのため作品を運ぶことも作品の一部だと考えています。そして展示されない時も同様です。僕の作品は固定された形をもっていますが、変化するようにつくられています。それは場所によって変化します。展示空間、移動時、保管される場所などです。それぞれの場所を想定しながらデザインすることは、少し遠くの未来に責任を持つことでもあると思います。

2. ジグムント・バウマン『リキッド・モダニティ』（大月書店、2001）